

# 随泉寺寺報

平成16年(2004年)5月号 第405号

082-892-0217 <http://ww41.tiki.ne.jp/~tetunari4/>

浄土真宗本願寺派 高峯山随泉寺

宗祖降誕会法要

講師 西方寺住職 安国真雄師

講題 「生死の苦海」

今日もまた胸に痛みあり 死ぬならば

ふるさとにいきて 死なむと思ふ (石川啄木)

明治四十五年四月十三日、啄木は妻と父、友人の若山牧水に看取られて、肺結核のため、満二十六歳で亡くなりました。

この日、東京は早くも桜の花びらが散っていました。啄木が故郷を最後にした五年前の春は、渋民村の桜は花が咲きかけていました。啄木は、亡くなる一年前も東京の上野公園で花見をしています。その時の花の色が寂しい色に映ったことが日記に記されています。啄木は故郷の桜を目に浮かべつつ、息を引き取ったことでしょう。

(啄木記念館「啄木歌ごよみ」4月12日より)

人は最後に懐かしいふるさとに帰って、生きたいと思う人が多いようです。懐かしい山々、懐かしい人々、そうしたものに囲まれて最後のときを生き抜きたい。畑賀の安芸市民病院に新しい病棟が出来ました。最後の大切な時を生きるのに素晴らしい病院です。嬉しいことです。

## 5月の法座予定

5月14日昼席午後1時より……降誕会法座

5月14日夜席午後7時半より……出張法座 中須賀集会所

5月15日朝席午前10時より……降誕会法座 初参式

5月15日昼席午後1時より……降誕会法座

6月2日午後6時より……門信徒会本部役員会



## 邪見 (よこしまな見方・考え)

イラクで3人のボランティアが人質になるという事件がありました。いろんな思いで行かれたことだと思いますが、無事救出されてよかったと思います。しかし救出されて帰ってこられたあたりから、【自己責任】という言葉が声高にいわれるようになりました。26日開かれた参院決算委員会で、柏村武昭委員(自民)が、イラクでの邦人人質事件を取り上げ、「人質の中には自衛隊イラク派遣に公然と反対していた人もいるらしい。仮にそうなら、そんな反政府、反日的分子のために血税を用いるのは強烈な不快感を持たざるを得ない」と述べた。私は同じ広島に住んでいるものとして、柏村氏の発言にたいしてとても悲しく、残念な思いをしました。広島という名はイラクの人々でも【平和の象徴としての広島】を話し、平和を伝えるシンボルなのです。彼ら3人は誰に命令されるのでもなく、子供たちのために、平和のために、自ら進んでイラクに行ったのです。



親鸞聖人は人間を凝視して、正信偈の中に次のように示しています。「弥陀仏本願念仏 邪見驕慢悪衆生 信楽受持甚以難 難中之難無過斯」

ここでの「邪見」、よこしまな見方・考えとは、ひねくれたものの見方をすることではありません。自分の経験・能力・分別を無意識のうちに絶対の拠り所としてものを見ること自体が偏っており、邪見だということです。それはやがて自分や他者のいのちを自分で価値付けることとなり、自他のいのちにかげられた願いを聞いていくことなど、この上なく困難なこととなるのは必然です。「人は無知によって迷うことはない。人は『自分は知っている』という思いによって迷うのだ」と言われた言葉が身にしみます。

## 初参式(初参り)

5月の15日降誕会法座朝席の後、初参式を開催いたしますので、平成15年1月から12月生まれの子供さんはふるって参加してください。



まず、人と生まれて初めてである儀式が「初参式」です。「初参式」とは新しい正命の誕生を喜び、み教えによってわが子が健やかに育つことを願ってお寺へ初参りすることです。子供が生まれて人間ははじめて親になるのですから、「初参式」は子供にとっても親にとっても初参りとなります。親子にとって人生におけるお念仏との新たなであいであります。阿弥陀如来のご本願をよりどころとあおぎながら、力強いいきぬくことを誓う大切な儀式と心得て、積極的に参加してください。

## 御礼

永代経懇志 五拾萬円 中本 健一殿 故 中本 玲子様 特別永代経志として

## 葬儀についておもう

「増えている近親者のみの葬儀」について思う

朝日新聞の家庭欄「お作法・不作法」というコーナーに、「近親者のみの葬式 どうする？」という記事がありました。最近、近親者のみで葬儀をするケースが増えてきていますが、葬儀のあと故人を知る人からの連絡が多く困惑したケースなどが紹介されています。

高齢化社会のなか、中野周辺でも、田舎からお年寄りを呼び寄せて同居する家庭や、仕事の一線から離れて暫くたつために関係者の少ない場合など、近親者での葬儀が増えています。

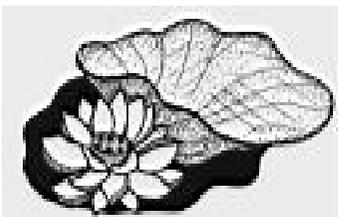
また近頃は葬儀社などでの葬儀が増えてきました。安芸農協さんも海田にセレモを作られたので、そこでの葬儀が増えています。昔は講中での葬儀でしたが、近所に迷惑をかけたくないというのか、新しい団地などは地域社会が確立していませんので、ますますその傾向が強くなっているのではないのでしょうか。しかし会館での葬儀はどれだけ会葬者が多くても寂しい場合があります。それは一緒にお勤めをしてくださる人が少ないからです。読経は僧侶だけがするものと思っておられるのかもしれませんが、お通夜の場合などは、最後に一緒にお勤めをして、お見送りをしたいと思います。

私は最近こんな経験をしました。 ごく親しい友人と親族だけの通夜、会葬者はいませんので、住職と一緒に大きな声で正信偈を読みます。初めてでも次第に調子が出てきて、みな声がそろい、お経が終わると、えも言われぬ充実感が残ります。お勤めが終わって、親戚のひとりが、「私たちも子どもの頃、おじいちゃんと仏壇の前でこの正信偈を読んだことを思い出した」と話していました。

話していました。

むしろ派手なお葬式よりも、近親者にとっては宗教的な意味合いの上からも、本来の葬儀の姿に戻ってきているということが言えるのかもしれませんが。単に近親者のみの葬儀が良いということではなく、多様化することが良いことだと思うのです。

基本的に、葬儀は故人にとってだけではなく、故人とのご縁のある方々にとっても大切な儀礼であることを忘れてはならないことと思います。ひとの一生の間には、多くの出会いの歴史があるはずで、たったひとりで生き続けている人などいません。それぞれのご縁のなかで、関係者の惜別の思いが表出されるのが葬儀の場です。それは、多くは遺族に対してではなく、故人に対してであります。したがって遺族の都合のみで限定された人により葬儀を勤めることの是非は、判断の分かれるところだと思います。



## これからではない すでに救いのみ手の中

カレンダー5月号 東井 義雄

あまり苦しめないように、あまり、まわりの者の迷惑にならぬような死に方、それはもちろん望むところです。が、そんな死に方を選びとる力のある私ではなかったのです。七転八倒、のたうちまわって死なねばならぬかもしれない私なのです。でも、のたうちまわって死んでも、「死にとうない」「死にとうない」と、わめきながら死んでも、まちががなく、摂め取られる世界が、ちゃんと、既に成就(完成)されていたのです。どこまで努めてみても「死にとうない」心の重みをどうすることもできないでいる「かくの如きの」「私」のためのご本願が、既に成就されていたのです。どんなに努めても、沈む以外ない私を、沈ませない船、それが、私のために用意されていたのです。

ここで、気がつかせてもらってみましたら、私の父は、「人間に生まれさせてもらった以上、ここまで来なかったら意味はないのだぞ」と、私を臨終の座に呼びよせてくれたのでなくて、いつの間にか、自分の力を頼む私に、「そんなもので、人生の一大事をのりこえることはできるものではないぞ」と教え、「生きても死んでもみ手のまんなか」という世界に目覚めさせるために、私を呼び寄せ、身をもって、私に、その広大無碍の世界を、私に伝えようとしてくれたのだと、気付かせていただいたのでした。

そして、思うのです。ひょつとすると、あの父は、如来さまが、私のためにお遣わしくくださった、如来さまのお使いであったのかもしれないと思うのです。そして、私にとって一番大切なことを、私に伝え、私を目覚めさせるために、「父」となつて、この世に現れてくれたのではないかと、思われてくるのです。

さいわいに、今のところ、私に、癌転移の様子はないようです。しかし、私の妹が申します通り、私も妹も、既に「ひび割れた器」のような身の上です。いつ壊れても不思議でない体です。「終わりの時」は目の前にあるのです。でも、妹も申します通り、「いつ壊れても み手のまんなか」です。終わってから「み手のまんなか」に捨てていただくのなら、「ひょつとして、捨てただけじゃなかったら……」という不安もあるのですが、現在ただ今、既に「み手のまんなか」なのですから、死にざまなどにかかわりなく、「いつ壊れても み手のまんなか」なのです。

この安らぎの世界に目覚めさせてくれたのは父です。父はやっぱり、まちががなく、如来さまのお使いだったにちがいません。

